

令和6・7年度 西東京市立学校教育研究奨励事業研究指定校（2年次）

自らの力で学びを進める 児童の育成

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の
一体的な充実を目指した授業デザイン



西東京市立柳沢小学校

ごあいさつ

西東京市教育委員会 教育長 後藤 彰

西東京市立柳沢小学校が、令和6・7年度の2年間、西東京市立学校教育研究奨励事業研究指定校としての研究を積み重ね、大きな成果をあげられたことに対して心から敬意を表します。本校が研究を積み重ねられた「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とは、皆さまもご存じのとおり「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」として令和3年1月に中央教育審議会から示されたものです。本答申には、「一人一人の児童・生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるようにすることが必要。」と示されています。「西東京市教育計画」においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、ICTを活用しながら個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実については重要課題と位置付けています。

本校は、「自らの力で学びを進める児童を育成する」ために、児童による主体的な学びのサイクルを重点に2年間にわたり研究に取り組まれました。「何を学び何ができるようになるかを明確にして、既習内容における児童の様子や、日常の様子などから児童一人一人の実態を把握し、個に応じた効果的な手だてを行い、学び方については児童に自己決定を促す。」また、「児童の振り返りを通して教師は次時の支援や手だて等を考え、指導の改善を図る。」など、一連のサイクルは日々授業を行っている先生方からすると、一見当たり前のサイクルであると捉えることもできます。しかしながら、一つ一つの取組を改めて見直し、より丁寧に行うことで、児童がより主体的に自らの学びを進めることができるよう、一丸となって研究に邁進されてきたことは、大変価値のあるものです。教科の特性を踏まえた上で、児童を見取り、必要な手だてを考え、学び方について自己決定を促す活動を軸とした研究はまさに本校だけでなく、市内全体にも寄与するものであります。橋本 誠之 校長先生をはじめ、2年間にわたり真摯に研究を進められたすべての教職員の皆様に、厚く御礼を申し上げます。また、明星大学 特任教授 相原 雄三 先生及び関係各位には多くのご指導・ご支援をいただきましたことを心から感謝申し上げます。本校の研究が今後さらに継続されるとともに、西東京市全体の教育課程及び授業改善がより一層充実することを御期待申し上げます。

西東京市立柳沢小学校 校長 橋本 誠之

令和6・7年度 西東京市立学校教育研究奨励事業研究指定校として、令和6年度は研究課題「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」をめざした授業づくりを目標に、児童の実態を研究課題の観点である「指導の個別化」「学習の個性化」「協働的な学び」等から分析した。その分析結果を受け、児童が身に付ける資質能力を育成するための授業実践（年間 23回）を積み重ねた。多くの授業実践から各教科や対象学年、校種（通常級と特別支援学級）の特性や目標等の違いによって、児童の「主体性」を育む（メタ認知能力育成）ために ICT 活用による自己評価・相互評価の手だてについては一定の成果はあった。ただ、児童の基礎的な知識技能、基本的な能力（読む・書く・計算力等）を効果的に高めていくことには大きく影響しているとはいえない結果だった。

そこで令和7年度にはめざす児童像を「自らの力で学びを進める児童」と再設定し、「個別最適な学び」の実践に焦点化した。研究の柱として、児童の実態把握を従来の視点に加え、生活体験、学習スタイル等「個人間差異」の視点を追加し多面的に分析することで、より細かく児童の実態把握に努めた。細かく分析した児童一人一人の実態に即して単元の指導項目を焦点化することで、より児童一人一人に寄り添った指導法の工夫を可能とし、個別最適な学びを中心とした授業改善に大きく結び付いた。

従来のような教員が先頭に立ち児童を先導する授業ではなく、児童が学びの主体者として学習を進め、教員はあくまでも伴走者として児童の学びをサポートする授業スタイルを本校では「個別最適な学びのための授業スタイル」と位置付けた。この授業スタイルを全単元、全教科で実践するためには、教員の授業力（教科の専門性）も高めなければ、児童一人一人に合った指導・助言を日々の授業で充実させることができない。さらに児童が一人では解けない問いも、他者（友達や大人等）と協働することを通じて、納得する解決や新たな考えが生まれるという「関わり合い」のよさを学習活動の中で繰り返し、経験させていく。これを「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と位置付けた。これらの手だてから単元構成や授業展開を工夫することを授業デザインとした。

令和7年度には年間講師に明星大学 特任教授 相原 雄三先生を招聘し、研究の骨格となる部分をご指導ご助言いただき、本研究に価値付けをしていただきました。また、2 年間にわたる授業実践では教員一人一人が教科の専門性を高めるために、各教科の講師の方々には何度も教科指導へのご指導ご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。終わりに教職員一同、毎日の授業が子供たちにとって楽しくやりがいのある授業であることをめざし、今後さらに研究研鑽を重ねてまいります。

研究経過は本校ホームページにてご覧いただけます



研究構想図

本校の教育目標

人間尊重の精神を基調とし、「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を備え、他者と協働して高い志をもち、新たな時代を切り拓く資質と能力をもつ児童を育成する。

考えて行動する子 思いやりのある子 きたえる子

児童の実態

- 素直に話を聞き、真面目に取り組める。
- 学力の二極化が顕著である。
- 学習に対し指示されたことは取り組むが自ら考えて取り組むことが課題である。

研究の背景

- 「学習指導要領」（平成 29 年度告示）
- 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
- 「GIGA スクール構想」

研究主題

自らの力で学びを進める児童の育成

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指した授業デザイン

目指す児童像

みどり学級

個別の課題に向き合い、目標の達成に向けて意欲的に取り組み、集団活動ができる子

低学年

自分の思いや考えを大切にしながら、他者と関わって楽しく学ぶ子

中学年

友達と関わりながら、自分に合った学び方を工夫できる子

高学年

学びを自ら設計し、他者とともに学びを深めていく子

研究仮説

よりよい個別最適な学びの充実を図るために、教師が専門性を高め、児童の姿を適切に把握することで、児童一人一人の力を伸ばすための具体的な手だてや効果的な支援、明確な評価が行えるだろう。また、児童が学習の中で自ら選んだり調整したりする経験や協働的な学びを重ね、自己評価や相互評価をしていくことで、自らの学習状況から課題を知り、目標を設け、よりよく学び、自ら伸びゆく力を身に付けることができるだろう。

研究主題に迫る手だて

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざした授業デザイン

児童の実態把握

- アンケート、レディネステスト診断シートの活用、日頃の様子
- 進度、到達度、応用力、興味関心、生活経験等の観点で個人間差異を明確化
- 見取った課題と手だて（具体的方策）の一体化

教科の専門性向上

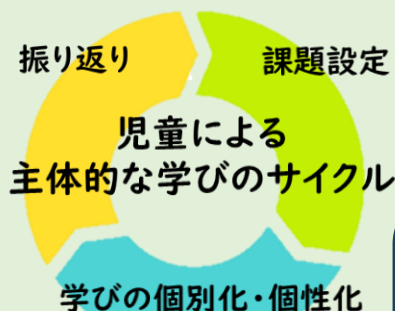
- 2～6名による教科ごとの研究チームを編成（10分科会）
- 複数の視点により教材を多角的に捉え、指導内容を焦点化
- 相互に授業観察、ミニ協議会で授業改善

指導と評価の一体化

- 評価基準と想定される具体的な姿の明確化
- 自己評価・相互評価によるメタ認知能力の育成
- タブレット端末の活用による評価の効率化

手だて

- 児童の特徴を生かした学びの個別化・個性化
- 自己選択場面の確保による主体性の育成
- 個に応じた効果的な手だて、指導助言



日頃の授業を支える基盤

タブレット端末の活用

〈教員〉学習状況の把握、資料活用、個別の評価
〈児童〉情報収集・共有、資料参照、他者参照、振り返り

交流学习

・通常学級と特別支援学級との交流
・異学年間交流 ・市外や海外との交流

教室環境整備

ユニバーサルデザインに配慮した教室環境

基礎基本の定着

・朝学習 ・学習規律の定着 ・放課後学習教室

授業デザインのポイント

①教科の専門性

何を学び（学習内容）、何ができるようになるのか（資質・能力）を明確にする。
予想される課題や期待される効果、関連する学習内容等の系統性を確認する。本単元によってどのような力を伸ばし、どのような力を付けることを目標とするのか具体的な児童の姿を考える。

②児童の実態

当該教科の既習内容における実態や日常の学習の様子、生活体験等を把握する。学習集団の個人間差異を明確にして具体的方策を工夫する。目標を達成した具体的な児童の姿を設定する。

③手だて

個に応じた効果的な手だてや指導・助言を検討する。学習活動で個人間差異が大きい内容は、学びの個別化・個性化による複線型の授業を展開する。

～個人間差異とは～
児童一人一人の特性や特徴を見取る際、三観点や単元の指導内容だけではなく、多面的に児童を見取ることにより、個人間の差が大きい項目を重点項目とし、個に応じた指導・助言の工夫を行う。

学びの 個別化・個性化

教師は単元の目標をすべての児童が達成するために、児童一人一人のよさや特徴を生かすことを想定し、児童が自ら選び、自己決定できる学習場面を設定する。

それにより、児童は自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んだり、どのような方向性で学習を進めていくとよいかを考えたりすることができる。

このことから、本校では児童一人一人の個に応じた指導を「学びの個別化・個性化」と位置付けた。

個人間差異の明確化

進度	早く終わったのに待たないといけない もっと時間が欲しい 
到達度	ここがまだよく分からない 説明もばっちりできるよ 
応用力	関連付けたり活用したり、 仮説を立てたりすることが 難しそうだな 
学習スタイル	新聞を書きたい スライドを作りたい 一人で！友達と！ 
興味・関心	このテーマ、面白そう！ やる気がでない… 
生活経験	見たことある！ やったことある！ 何それ？初めて知った 
感じ取り方	これがいい あっちがいい すごい！ 普通じゃない？ 

④指導と評価の一体化

児童は自己評価や相互評価に繰り返し取り組むことで、自らの姿勢や資質・能力を客観的に捉えるメタ認知能力を高めていく。

教師は単元の目標を達成した時の児童の姿や本時の評価規準を明確にすることで、目標達成に向けた手だてをとり、指導改善を図る。

授業デザイン例

第6学年 社会科「国の政治のしくみと選挙」(全7時間)

問題:日本の政治は、国民の豊かな生活と願いの実現のために、どのような働きをしているのだろう。

つかむ

知識及び技能の習得



調べる

手だて1 学習意欲を高めるための導入

教師は単元を通して児童が「自らの力で学びを進める」ために、導入時の資料を複数用意する。児童の個人間差異「興味・関心」「生活経験」を踏まえ、提示する資料を選択する。

手だて2 単元計画の工夫

個人間差異「進度」に差がないため、「調べる」学習活動を情報の共有化で時間短縮を図り、「いかす」学習活動に重点を置いた単元を計画する。児童は「自らの学び」をまとめ「いかす」ことに十分な時間を確保することで学びへの関心を深める。

めあて:選挙の投票率の課題と解決する方法について考え、表現しよう。

いかす



思考力・判断力・表現力等の育成

学習スタイルの違い

手だて3 学びの個別化・個性化

児童は学んだ知識等を実生活に照らし、自らが伝えたいことや考えたことを効果的に表現できる方法(個人間差異「学習スタイル」)を選ぶ。その際、伝えたい内容が自分に近い友達と協働することで、考えを深めたり広げたりする学びとなる。

学びの個別化・個性化

スライドにまとめる

友達の考えを参考にしながら進められる。



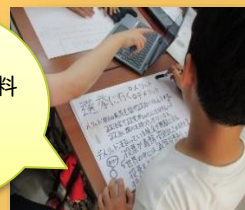
動画を作る

好きなプログラミングで動画を共同製作しよう。



紙芝居形式にする

分担して資料を作ろう。



手だて4 軌道修正のための思考ツール

児童は友達と考えを交えたり、自分の考えを深めたりする過程で「伝えたいこと」がズレてしまう場合がある。そこで、児童が常に「伝えたい考え(思い)」に立ち返るために、自らの考えを可視化できる思考ツールを用意した。このことにより、児童は安心して、自らの考えを効果的に形にするための学習活動(アウトプット)に取り組むことができる。



まとめる

自己評価・相互評価



今度はこの方法でやってみよう。



この資料の方が分かりやすいな。

確かにそうだと思う。考えに納得した。この解決方法が実現すると思う。

手だて5 振り返りシート

理解した内容を記述する項目と学び方に関する項目の振り返りをタブレット端末で行う。このことで児童は毎時間、互いに振り返りや進捗状況を参照でき、自らの学びの「進め方」や「考え方」に生かすことができる。また、教師は児童の評価を次時の学習活動に生かすことができる。

各学年の授業デザイン例

高学年

第6学年 家庭科

「朝食から健康な1日の生活を」(全10時間)

栄養バランスを考えた朝食のおかずを作れるようになろう。

自分の課題を設定

「学習ナビ」(手引き)を用いてガイダンスを実施した。



進度・到達度・応用力・学習スタイル・興味関心・生活経験・感じ取り方の違い

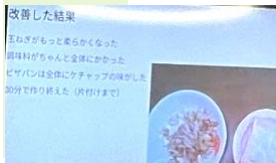
学びの個別化・個性化



単元計画では導入時と終末の報告会以外は自分のペースで学習を進める計画を立てた。児童は友達の実習の様子を参観し、自らの実践や生活に生かしていた。実習の前後には家庭で調理に取り組み、改善を図る児童が多く見られた。

報告会・振り返り

自己評価・相互評価



児童が報告会に向けて発表内容を考えたり、友達の発表を聞いたりする学習活動は、知識の定着や学習内容の理解にもつながった。

中学年

第3学年 国語科

「れいの書かれ方に気をつけて読み、それをいかして書こう」(全13時間)

すがたをかえる食べ物事典を作ろう。

学習課題・学習計画

到達度の違い

文章の構成



学びの個別化・個性化

一人で ペアで グループで 先生と

知識技能の習得段階では、児童が自ら学び方のヒントになるカードや到達度に応じたワークシートを選べるように準備した。

興味・関心の違い

調べる・書く

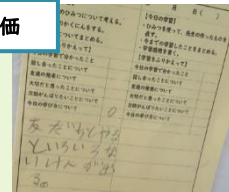


学びの個別化・個性化

一人で ペアで グループで

調べる活動では、同じテーマの児童で協働的に取り組んだ。「学習ナビ」(手引き)を活用することで、教師が児童の学習の進捗状況を把握できるようにした。

自己評価

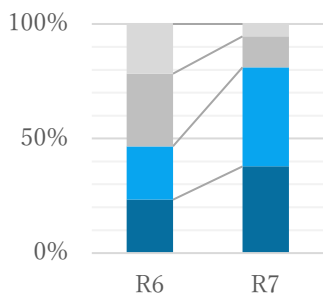


毎時間の振り返りで「学んだこと」「学び方」「友達との交流」等の振り返りを積み重ねたことで、児童は次時のめあてを立てたり取り組み方を考えたりできるようになった。

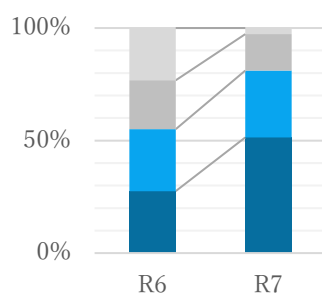
研究のまとめ

【学習の自己調整に関する調査】

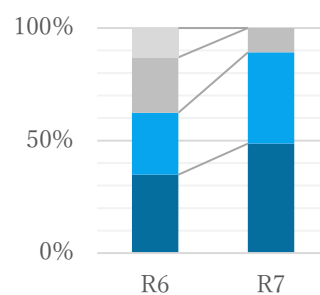
①学習の計画・進め方を自分で考える力



②自己評価を通して改善につなげる力



③目的意識をもち、学びを調整する力



■よくできる ■できる ■少しできる ■あまりできない

～児童アンケート調査～

低学年11項目、高学年15項目で実施した。大きな変容が見られた項目の質問内容は以下の通りである。

- ①勉強するときは、これからどんな内容を学習するのか見通しをもってから始めている。
- ②勉強のやり方が、自分に合っているかどうかを振り返り、次に生かしている。
- ③勉強しているとき、めあてに沿って進められているかどうか、振り返って確認している。

※令和6年10月と令和7年7月で比較

主に高学年では、個別最適な学びの充実を目指した複線型の授業実践を積み重ねてきた結果、上記のグラフにおいて肯定的な回答率が一年間で26～34ポイント増加した。このことから、児童が自ら選んだり調整したりする学びを積み重ねることは、学習の自己調整力(もしくは自己調整に関する意識)の向上に繋がることが分かった。今後、低学年からも実践を積み重ね、低学年から高学年までの段階的育成についても取組を整理し、学校全体として自己調整力の育成を図っていく。

第1学年 算数科

「かたちあそび」(全5時間)

かたちあそびをして、かたちのとくちょうをしよう。

積み木あそび

興味・関心の違い



学びの個別化・個性化



タワー



コロコロ



かたちあて



うつしえ

児童が十分に体験できるような場を設定し、立体図形の機能や特徴を捉えられるようにした。第1時は一斉指導で児童が学習の進め方やルールを理解する時間とした。第2～4時は学習の場や費やす時間を児童自ら考え、主体的に活動した。

自己評価

学習内容	学習態度	学習成果
1. かたちあそびのルールを理解する。	◎	◎
2. 積み木を使って、かたちを作る。	◎	◎
3. かたちを覚えて、友達に伝える。	◎	◎
4. かたちを覚えて、友達に伝える。	◎	◎
5. かたちを覚えて、友達に伝える。	◎	◎

まとめ・振り返り

振り返りカードでは、学習内容について記述し、学び方はマークに丸を付ける形にして学習を振り返ることに取り組んだ。

情緒学級 自立活動

「やぎさわハンバーガーショップを開こう」(全4時間)

やぎさわハンバーガーショップを開こう。

学習課題
学習計画

合 「やさしく」
い 「きちんと見る・聞く」
言 「さわがない」
葉 「わからないことは聞く」



めあての確認

授業の始めに個別に確認する。



必要なスキルの違い

学びの個別化・個性化

正確に聞いて
行動する役割分担し、
友達に関わる適切な言葉や態
度を身に付ける

児童自身が客観的に学習を振り返ることが難しいため、友達からの評価を受け自分がどこまで目標を達成できたかを振り返るようにした。

自己評価・相互評価

学習内容	学習態度	学習成果
1. ハンバーガーの作り方を学ぶ。	◎	◎
2. ハンバーガーの作り方を学ぶ。	◎	◎
3. ハンバーガーの作り方を学ぶ。	◎	◎
4. ハンバーガーの作り方を学ぶ。	◎	◎
5. ハンバーガーの作り方を学ぶ。	◎	◎

まとめ・振り返り

本時で児童が学習に取り組んでいる様子を画像で示すことで、児童が日常生活と結び付けながら振り返ることができた。今後、学びを生かす場面も振り返りをする。

成果と課題 今後の展望

【成果】

- ・児童が学習スタイルを自ら選んだり、学習進度を調整したりしながら学習を進める経験を重ねることにより、児童の自己調整力が向上した。
- ・教師が学習集団の個人間差異に着目して手だてを考慮することで、低学年から「学びの個別化・個性化」を図ることができると分かった。
- ・自己評価・相互評価において振り返りの視点を意図的に与えることで、児童は自分の考えが広がったり深まったりしたことに気付いた。また、自らの学び方を振り返ることで学習状況を把握し、見通しをもって学ぼうとしたり、次時に生かそうとしたりする姿が見られた。

【課題】

- ・教師が目標達成に向けて授業を改善していくためには、適切な評価が必須である。いつ、どのように評価し、どのように指導、支援していくか(指導と評価の一体化)をさらに学んでいく必要がある。
- ・児童の特性、特徴が多様であるからこそ「学びの個別化・個性化」を図り「協働的な学び」が一層充実するため、児童の学びが深まる。教師は、このことを理解し、毎日の授業が教師主導ではなく、児童主体の授業へ転換していくためにさらなる研究研鑽を積み重ねていく必要がある。

【今後の展望】

発達段階、学習集団の実態に応じて「学びの個別化・個性化」を徐々に「学びの複線化」にしていくことで、児童はさらに主体的に学びを進めていくことができる。そのために、基礎的な学習方略や学習規律の定着、互いを認め合う人間関係の構築、落ち着いて学習できる環境の整備等の基礎的・基本的な土台作りを継続していく。これらを通して児童一人一人が自らの力で学び進めていくために、全教師が専門性を高め、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図った授業をデザインし、授業実践を継続していく。

おわりに

副校長 西山 理紗

本校は、令和6・7年度西東京市立学校教育研究奨励事業研究指定校として、「自らの力で学びを進める児童の育成～『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指した授業デザイン～」を主題に、研究を進めてまいりました。

2年間の校内研究を通じて、互いの授業を見合い、教科ごとの分科会で指導案を練り上げ、互いの学びを伝え合うプロセスを大切にしてきました。その結果、教員が「学びの主体は児童である。」という教育観に改めて立ち返り、児童が自分の学びを自己調整できるよう、児童の個人間差異を把握し、実態に即した授業展開の工夫について一人一人が考え、授業実践を積み重ねてまいりました。この2年間の経験と学びの成果を、今後の教育活動に生かしてまいります。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました明星大学 特任教授 相原 雄三先生をはじめ、多くの講師の先生方、西東京市教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

ご指導いただいた先生方（順不同）

○明星大学 特任教授 相原 雄三 先生

○筑波大学附属小学校 教諭 田中 英海 先生

○元鎌倉女子大学 准教授 齊藤 純 先生

○武蔵野大学 准教授 伊藤 摂子 先生

○西東京市立けやき小学校 校長 前田 元 先生

○立川市立幸小学校 校長 菊池 修 先生

○青梅市立第四小学校 指導教諭 松村 友子 先生

○江東区立明治小学校 統括校長 喜多 好一 先生

○元東京都小学校特別活動研究会 会長 木田 明男 先生

○西東京市教育委員会教育部教育指導課 指導主事 田邨 佳宏 先生

○元東京都多摩教育事務所教育指導課 指導主事 小谷 明菜 先生

○練馬区立大泉第二小学校 指導教諭 嵐 元秀 先生

本年度の研究に携わった教職員

◎研究主任

○研究推進委員

校長	橋本 誠之	副校長	西山 理紗	副校長業務支援員	大滝 芳子
1年	橋本 尚子	久保 剛志	養護教諭	山田 有希子	
2年	溝上 紀子	○篠井 恵莉依	事務	戸田 沙奈恵	濱野 静香
3年	◎松本 美佐	河野 駿輝			
4年	山口 遥平	田端 友美子	久地浦 玲子		
5年	小原 寛経	吉澤 清夏			
6年	廣田 元嗣	関 笙華	○鈴木 幸大	学校司書	塩田 花恵
算数	○小林 歳子	音楽	福原 奈那子	図工	齊藤 友香
みどり A	磯部 知恵	釜 しほり	○北村 風栞	町田 彩香	貫井 良史
	永木 富美子	植松 卓也			
みどり B	○中村 芙実子	長岐 周子	平田 勝哉	加藤 ゆい	飛永 夏穂
栄養士	古市 真寿美	スクールカウンセラー	山本 可奈	学年教育アシスタント	山本 進次
スクールサポートスタッフ	中谷 亜紗美			学校用務	細井 裕行
非常勤講師	小林 克彦	高山 ひふみ	谷本 昌彦	渡辺 有美	川井 葉子
	岩崎 志乃				

西東京市立柳沢小学校

〒188-0012 東京都西東京市南町2丁目12番37号

